

生後3か月の孫のビデオを撮ろうと思った。椅子に座らせて、前に坐り、あやしなながら、その背後にビデオを据えて撮った。孫の顔が大きく映る筈であったが、私の後頭部が邪魔をして孫の顔は映っていなかった。私の頭の真ん中の毛が薄くなって周辺が白髪になっていた。始めて自分の頭の後ろを拡大して見た。気持ちが悪い映像をみてしまった。

人は自分の今を客観的に見せられたくないものだ。

大学の父兄の懇談会で新生生の母親が近寄ってきて言った。「物凄いお爺さん先生がいるって息子が言っていました」。私は答えた。「それは私のことですよ」母親は、しまったと思ったが、「絶対に先生ではない」と言い張った。しかし私の学部は、若い男か、おばさん先生しかないので、その学生が言っているお爺さんは私である。彼女には、私は物凄くはない「唯のお爺さん」に見えたらしい。

授業で学生に聞いた。「老人って何歳からだと思う？」概ね65歳に手を挙げた。59歳と主張する学生もいた。若者にとって親より年上はみんな年寄りだ。年寄りは、「物凄い年寄り」か「普通の年寄り」しかいない。

若者とは老年期を想像できない人たちのことである。そして母親と同じ年頃の女性は皆おばさんである。

おばさんになると、綺麗な年寄りや気持ちの悪い年寄りの分類ができるようになる。

おばさんとは老年期に入った人々の間にも違いがあり、個性が存在することを分り始める年頃の女性のことであ

る。お婆さんはおばさんの延長であるが、お婆さんは自分は決してお婆さんにはならないと確信している。

長年診ていた患者が私と同じ大学の工学部出身であることが分った。私は患者に言った。「私の大学の先輩だそうですね」患者は「えー！」と言って椅子から立ちあがって驚いた。私は出身大学が違っていたのかと思って、悪い事を言ってしまったと、後悔した。しかし私と同じ名古屋大学の卒業であった。彼は言った。「私は先生の後輩ですよ！」

ヒトは自分と同じ年頃の人より若いと思いたいものだ。時折、子供を映した20年前のビデオを見る。20年前のその時は、それまでの人生の中で一番黴と白髪の多い時であった筈だ。妻も私も映りたくなかったのだが、嫌がる私を息子が撮影したものである。

一緒に見ていた息子が言った。「青年のようだね」。その息子も年を取った。

未来から眺めれば孫も息子も私も、今が一番若い。20年後に私の後頭部のビデオを見れば青年のものであるに違いない。

過去から眺めれば、生まれて3か月の孫だって、今が最も年を取っている。

